

1 a 向上  
b 共有  
c 死守

2 A 健  
B 早  
C 大  
D 強  
3 1 ウ  
2 才  
3 ア

4 (記述題)  
5 侵略さしま進化  
6 (記述題)

(5 完答)

7 鎖国はなかつた  
8 才能で

9 国づくり  
10 ア

11 才能重視  
12 日本には、

2  
1 a 屋号  
b 断言  
c 説得

2 それは、  
3 イ  
4 1 ウ  
2 ア  
3 才

(4 完答)

5 ウ  
6 エ  
7 母の実家  
8 (記述題)  
9 ウ

1  
4 I 古いものが残っている  
II 才能の抜擢があまりない  
(完答・同意可)

6 異なるものとの接触をなるべく少  
(同意可)

2  
8 座敷わらしに会えなくなつたこと  
(同意可)

「配点」	
その他	11 4 1 6 2 3
	22 8 1
各4点×14	各2点×13
各6点×3	各3点×13
各8点×5	各18点×2
56点	26点

①

- 1 aは、「充実」「成熟」「覚醒」とならんでいるので、「よりよい方向、すぐれた状態に向かうこと」という意味の「向上」があてはまる。bは、「偉いさんたち」がみな同じ情報をもっていたということである。cは、「こだわり」から見て「命がけで守ること」という意味になる。
- 2 Aの「質実剛健」は、中身が充実して飾り気がなく、心身ともに強くたくましいさまを表す。Bの「時期尚早」は、そのことを実行するには、まだ時が早過ぎる、という意味になる。Cの「内需拡大」の「内需」とは「国内需要」ということなので、国内に投資をして消費を増やすことになる。Dの「西洋列強」とは、とくに十九世紀から二十世紀初頭にかけて植民地化政策をとっていた西<sup>せい</sup>欧<sup>おう</sup>の強力な国々のことを言う。
  - 1 異との戦争がない ↓ つまり(言いかえ) ↓ 侵略されることがない。
  - 2 島国で敵の攻撃を受けなかった ↓ だから(順接) ↓ 古いものが残っている。
  - 3 古いものが残っている ↓ しかし(逆接) ↓ 激烈な歴史がなく、才能の抜擢がない。
- 4 どちらも【中略】までの部分で説明されている。Iは侵略されなかったことによるプラスの面で、「確かに…」以下で書かれている。IIは、「世襲」に結びつけてマイナス面を書けばよい。二つとも本文の表現を利用できるが、字数の条件がかなりきびしいので、とくにIIは短くまとめる必要がある。
- 5 「人類の歩みがわかる」ような歴史とはどういうものか、と考えて、これも【中略】までの部分からさがす。
- 6 政策のねらいが問われているのであって、「江戸幕府をつくった」「鎖国をした」という行動や結果が要求されているのではないことに気づいてほしい。本文全体とのかかわりから見ても、「異なるもの」との向き合い方について書かなければならないはずである。本文中のことばをできるだけ使うこと。
- 7 「鎖国に行き着く」と「むしろ鎖国が行われていたために」の間に書かれていることがらなので、「鎖国」に関してのことばであることは明らかだろう。さらに「ちょっと言い過ぎで、当然あった」から見ても、「なかった」という意味のことばもあると考えられる。
- 8 「世襲」と対比されていたのは「才能の抜擢」「才能重視」なので、その説明になることばをさがせばよい。
- 9 明治維新では「才能重視」の「国づくり」をしたが、日本は「世襲の原理」が作用しやすい、と述べたあと、「ではどうするのか」と言っている。直後の文で「そうした国づくりでも、私は別にいい」と書かれていることからわかる。
- 10 直後の文で「競争するようなことは少なくなります」とあり、さらにその次にも「争いは、あまり起きなくなる」と書かれている。
- 11 前の道は、のんびりとした国づくりを目ざすもので、世襲万歳で争いのないやり方になる。後の道は「争い」をしていく生き方だから、「世襲」とは反対に「才能」を重んじることになる。
- 12 「根本原因」とは、この場合、日本人の性質のことである。のんびりやりたいという日本人の性質について書かれた部分があったはずだが、「ガラパゴスに…」の文では性質の内容が具体的に書かれていない。

②

- 1 aは家の呼び名のことだが、「商店の通称」という意味でよく使われる。bは、確信を持つてきっぱりと言いつ切ること。cは、よく話して相手に納得させることである。
- 2 問いに「けつきよく」とあることに注意する。いったんは「ソウタさんの弟らしい」と思って「どこかで見たはずだった」と言っているのだが、【中略】よりあとの部分で「思い出した」ことがあったと書かれているところがある。
- 3 孝太は「中学校にいらっている」とあり、「ソウタ」は孝太と「同じ年」である。ところが、目の前の男の子は「わたしと同年齢くらい」なのだから、ソウタの弟だと思っただろう。「テルジ」と名のつた、ということはソウタではなく、それでも「カマヤ」に住んでいるのなら弟にまちがいない、と思っただのである。
- 4 1は「へたくそな字」と言つて「けらけら笑った」ことに対する反応である。2は二つめの「…見ることができると思ったから」に注目すれば、安心したとわかる。3は、母のことばによって「次の夏」には見ることができない、とわかったので残念に思っただろう。
- 5 AやCは、母に、どうしてそんなことを聞くのかと言われないうようにするために心くばりであると考えられる。Bも、そのあとのことばを言ってしまうと、やはり母に「なぜ」と問われることになるだろう。
- 6 照児が座敷わらしであるなら、ソウタの弟ではないことになる。ところが、「ソウタの下に、もうひとりいる」と言われたので、それなら弟か、と思つて「がっかり」したのである。
- 7 「母の実家のとなり」が「ハカリヤ」であり、そのとなりが「カマヤ」である。つまり、照児の言ったことばは「おれのうちは母の実家である」という意味にもとれることになる。
- 8 「しまった」という残念さを表すことばから、「幼年時代が終わり、おとなになってしまったさびしさ」を感じてほしい。
- 9 「あてはまらないもの」を**選ぶ**ことに注意する。照児は最初に来たときに名前を言ったのだが、「次の日」にもきているので、二度きたことは明らかだし、本文冒頭に「よく遊びにきた」とあるので、このあともきたと考えられる。